

漢法苞徳塾資料	No. 157
区分	臨床各論
タイトル	診断セミナー・2
著者	八木素萌
作成日	1997.08.10

◎主訴は、重痛い腰の鈍痛と「痰」が粘って切れないことその上全身的倦怠感があるのが気になる、と言う事である。

顔形では「火」に相当しており、顔色には煤けたような垢ついたような色に汚泥のくすんだ黄色味のような色も混ざって現われている。しかも普段の顔色に比べると少し赤黄色気味も見え（熱・「火」の反応）、全体的には軽度の浮腫も見られる。ややのぼせている様子である。尺膚には「数」と「緩」が見られた。

触診（八虚診、募穴・腧穴診、腹診－臍傍診その他、背候診、経脈切診など各種の触診法を用いて）の結果、三因では「外感病」、諸反応では「相火」・「火」と「土」と「金」「水」などが複合的に触知された。「経脈切循診」では「土」と「金」の変動が主要なものであった。

罹患したのは八月後半で「台風が近付いている」と天気予報された頃である。診察したのは9月の初旬である。

下記のような「診察チェック表」の記入結果である。これを病解しなさい。

注

「五行色体表」は参考にすると、煩雑な陰陽五行論を臨床診断的に運用するのに便利である。

診察チェック表

〈▲印は変動があった部分を示す〉

漢法苞徳塾

三因弁別	内因		▲外感		不内外	
	病 因	木	▲火	▲土	金	水
	八虚診	木	▲火	▲土	▲金	▲水
	尺皮診	木	▲火	▲土	金	水
侯背診	一 般	▲木	火	土	▲金	▲水
	腧 穴	木	火	▲土	▲金	▲水
腹 診	難経型	木	火	▲土	▲金	水
	塾一般	木	▲火	▲土	金	水
	臍傍診	木	▲火	▲土	▲金	水
	募穴診	▲木	▲火	▲土	▲金	水
病理産物	▲痰	飲	▲瘀	火	二便	

◎診断としては、次のうち何れが適当な判断か？解答しなさい。（正しいものに○印をつけなさい）

- a. 病因は「暑（火）」・病んでいる臓腑は「土」「金」、仕事の条件の為に「水」にも影響が現われているが、微熱が籠っているのが「土」「火」反応となり、「土」「金」「水」の複合的反応は全身的な微腫に対応した反応である。皮膚色の〈汚濁した黄赤色〉と言うのは、時邪（暑＝熱湿）が籠っている状態にあること、つまり、「のぼせ」と「湿熱」症候に対応し、「水」反応とも見合っている。
- b. 病因は「湿熱」であり、「土」「火」の反応は病因に伴っている、また「火」型の人が処暑前後に病んだのであるから当然である。「火邪」は陽気を耗散するので、「金」を剋することになる、「金」の反応を示すことになろう。これは「痰」を生じる、この「痰」がネバって切れないと言うのは「熱」邪の燥の為であり、同時に「湿」邪の「粘着」性にもよっている。顔色の汚濁した黄赤色も、腰に「重痛」があるのも、「軽度の浮腫」も「全身的倦怠感」も「土」「金」に「湿熱」邪が留滞している為である。「侯背診」の「水」反応は腰が陳久性に問題を持っていたことを暗示する。また、「侯背診」の「木」反応は、「土」「金」の病変が気滞となるので、「大椎」中心の部位に所謂「気鬱」として現象する。これが「木」反応として触診される為である。
- c. 夏土用の気候不安で蒸し暑い時に「肺」が「時邪」にやられたので、「火」「土」「金」に反応している。尺膚の「数」と「緩」は夏の蒸し暑さの為に消耗しているからである。「微腫」は「湿熱」による「気虚」の為で、少し「夏風邪」気味のように思われる。このことは「腰痛」の「水」反応をも説明していよう。「痰」が「粘って切れない」と言うのは「口渇」があることを物語っており、それは、「湿熱」を示す「火」「土」反応となって表現されている。その「火」「土」反応は具体的には「胃熱」の病症となっている筈である。「経脈切循診」から病臓腑は「金・肺」「土・脾」と把えられる。顔色は「時邪」の内「湿」邪要因の影響の方が強いことを示している。腰の「重痛」感は、もともと慢性的に腰に問題があった為と侯背診から考えて良い。症状が自覚されたのは「肺」「胃」が「湿熱」の為に病んだ為であろう。
- d. 初秋であるので時邪は「金」である。それが「木」を剋したので熱が籠ることになっているのが「火」反応として現われている。「水」反応と言うのは「金→水」の関係と「水→木」の関係で、共に「相生的」に「水」があるから「水」反応が見られても、何の不思議もない。「土」反応はもともと「胃」が悪いから。「病因」反応に「金」が出ていないのは発病時期から見ると不思議と言う他はない。